



## 芝野松次郎先生との思い出

著者	小野セレスタ 摩耶
雑誌名	Human Welfare : HW
巻	10
号	1
ページ	51-55
発行年	2018-03-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027436">http://hdl.handle.net/10236/00027436</a>

# 芝野松次郎先生との思い出

滋慶医療科学大学院大学 小野セレスタ摩耶

## I はじめに

この度、芝野松次郎先生との思い出を書かせていただくこととなった。私は修士課程からお世話になったのであり学部からの生粋のゼミ出身者ではない。たくさんの卒業生がいらっしゃる中で、私で大丈夫なのかという思いもあるが、主に博士学位を取るまでのことを振り返ることとしたい。あくまでも私が感じたことや視点による記述となるため、偏りがあることをお許しいただきたい。

## II 先生との出会いと修士課程での指導

### 1 出会い

初めて芝野先生にお目にかかったのは、大学院受験のための事前面談であった。確か場所は、神戸市勤労会館。神戸市の仕事の合間を縫っていただいた面談時間だったと思う。もう夏だったが、先生がダブルの明るい色のジャケットを着ていらっしゃり、緊張でガチガチの私に穏やかに、大学院ゼミと研究内容をご紹介くださった。そのとき、なんと物腰の柔らかい先生なのだろう、この先生のところであればでの悪い私でもついて行けるかな、と思ったのをよく覚えている。

大学4年の夏も近づくころ、大学院進学を決めたものの、どこに進学すべきか悩んでいた。岩田泰夫先生（元神戸女学院大学教授）にぜひ連絡をとってみなさいとご紹介いただいたのが芝野松次郎先生だった。入試まで余裕のない中、大緊張しながら研究室に電話をした。何度電話をしてもつながらず、結局社会学部事務室に電話をし、先生からご連絡をいただき事前面談となった。

入学してわかったのは、連絡を取り始めてわずか2週間程度で芝野先生と連絡がとれ、面談ができたこと自体が奇跡に近かったということ。当時先生は多忙を極めていらっしゃり、気を付けていないとダブルブッキングどころか、トリプルブッキングさえも起きていたからである。もちろん岩田先生がきっちりとならないでくださっていたからこそであるが、それでもよくぞあの短期間に面談できたものだと思う。

### 2 ゼミでの指導—Catch Positive で自由な雰囲気—

大学院ゼミは、E号館地下の口の字型に机が並んだ教室で行われていた。一つ上の先輩が5名、私の学年が3名とそれだけでも院ゼミとしては大所帯であったが、さらに博士課程の先輩方も一緒になってゼミを行っていた。前半は洋書購読、後半は発表。確か最初はそのようなスタイルであった。E号館地下はいつも湿度が高くじっとりとしていたが、毎回自分のゼミ発表の時期が近づくとも一段と湿度が高く感じられた。特に修士課程のころは、芝野先生はもちろんであるが、博士課程の先輩方にどのような質問やコメントをいただくのかと何日も前から緊張し臨んでいた。毎回、今回も不十分だったと落ち込みながら帰宅していたものである。

しかしながら振り返ってみると、それら質問やコメントは、決して批判や否定に溢れたものではなく、どうすれば本人の研究のよい側面を生かしながら修正できるのか、足りない部分をどうしたら補えるかという視点であったことに改めて気づかされる。これは、芝野先生がいつも「Catch Positive に行きましょう」とおっしゃっていたことが大きいと思う。今から思えば、かなり自由に、そして好き勝手に発言をさせていただいていた。また、ゼミ運営も大らかな雰囲気でゼミ生の自主性に任せてくださっていた。ゼミ時間の先生のご発言は、全体の1割程度。先生が直接多くをご指導なさるというよりは、ほとんどの時間

を自由に各人の研究についてゼミ生同士で議論をした。熱心な議論のあまり、話が発表者の研究の根幹からずれたり、その議論がその研究の向上につながらないとか判断なさったりした場合のみ、先生がタイミングをみて方向修正や指導をしてくださる、そんなゼミであった。

このゼミスタイルは、人間福祉学部が新設され G 号館に移ってからもしばらくの間続いた。多い時には 20 名近くで時間を忘れていろいろな議論をした。

“Catch Positive” は、自分が院生を持つ立場になった現在、大いに役立っている。ゼミ生指導では研究についてのみではなく、どうすれば本人の強みや個性を活かせるかを考えること、そして、研究の改善・修正点などを最初から指摘するのではなく、院生自身で気づけるようにすることが重要だと改めて気付かされた。先生は、いつも自分で気付くことができるよう、ヒントを出しながらギリギリまで待ち、どうしても必要な時だけ指導（時には叱咤激励）してくださっていたのである。教職に就いてから、先生にどうしてそんなに待つことができるのかとおうかがいしたことがある。その時の先生のお言葉は、「自分で気付かないと意味がないでしょう」、というシンプルなものだった。

### 3 はじめての社会調査—行政との関わりのはじまり—

話は戻るが修士課程 1 年の 11 月ごろ、先生から A 市の保育調査をやってみないか、うまくいけば修士論文になるとお誘いをいただいた。1 年の秋になっても十分にテーマを絞り切れていなかった私は、よくわからないままやってみることにした。当時すでに保育所の待機児童が大きな問題となっており、その数は 2 万人とも 3 万人ともいわれていた。A 市でも待機児童解消は喫緊の課題であり、保育施策展開の根拠の一つとして保育実態調査を行い、児童育成計画を策定することになっていたのである。担当職員との打ち合わせ、質問紙づくりと調査の実施、データ入力に分析、そして報告書作成と、今では科研費等の外部資金による研究などで当たり前のようにやっているすべてのプロセスが、新鮮かつ高い壁のように感じられた。A 市の保育ニーズの高さに驚きながら分析し、慣れない報告書作業に苦労した。

基本的な社会調査や分析の知識も何もかも欠落していた私にとってはかなりのハードな体験であったが、調査データを使って苦労しながら修士論文を書いた。テーマは、「保育利用に関する実態と保育需要に関わる要因の分析」。実態調査で明らかになったニーズから、保育需要を予測する内容であった。修士論文の口頭試問後、芝野先生から「良い出来だった。いつも厳しい評価をされる副査の故浅野仁先生（関西学院大学名誉教授）が大変高く評価してくださった。私もとてもうれしく思っている」という旨のメールをいただいたときには、論文の評価はもちろんだが、先生が喜んでくださったことがとにかく嬉しく涙した。今でもそのメールは大切に保管している。

## Ⅲ 関わる機会をいただいた研究—博士学位を取得するまで—

### 1 関わる機会をいただいた研究

修士課程に在籍して以降、一応の独り立ちをするまで、芝野先生が代表研究者をなさった研究には多く参加させていただいた。複数の研究が同時並行で動いていることも少なくなかったが、私が関わらせていただいたものだけで自治体からの委託研究（A 市、B 市）4 件、科研費（厚生労働科研 2 件、学術振興会 1 件）3 件、COE プログラムによる研究 1 件の合計 8 件である。

はじめは、「児童福祉専門職の児童虐待対応に関する専門性向上のためのマルチメディア教育訓練教材および電子書式の開発的研究」（平成 13－15 年度厚生労働科学研究子ども家庭総合研究事業）（芝野 2002 a）であった。本研究で先生の Modified-Design and Development（以下、M-D&D）によるソーシャルワーク実践モデルの開発的研究（芝野 2002 b；2015）を初めて経験した。むろん研究協力者であったため大した役には立てていないが、さまざまな打ち合わせを行い、実態を明らかにし理論をもとに必要な実践モデルを、まさにデザインし開発していくプロセスを垣間見ることができたのは新鮮な経験であった。この時

ほど大きなチームで動いた研究はなかったと思う。

最後は「ソーシャルワークとしての『子育て支援コーディネート』実践モデルの開発的研究」平成 22-24 年度日本学術振興会研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 22330178（芝野 2012）。途中から研究協力者から研究分担者にならせていただいた。また成果として本を共著させていただく機会も得た。

いかに研究環境に恵まれていたかがよくわかる。各調査や研究が進捗していく様を、研究姿勢、研究手法、行政や関わる研究者・協力者等との交渉術、打ち合わせ方法などさまざまな事柄その一つ一つを、間近で先生の姿を見て学び、また、時には実体験できたのである。その他、科研費申請書類も申請のたびに見せてくださり、大いに勉強させていただいた。

たくさんの学びを得た研究の中から、博士学位論文に直接つながった B 市からの委託調査ともう 1 件の厚生労働科学研究について書いてみたい。

## 2 行政からの委託調査—B 市との出会い—

### (1) 前期計画

博士課程に入ってはじめての調査は、次世代育成支援行動計画策定（以下、計画策定）のための実態調査（以下、ニーズ調査）であった。B 市から芝野先生にニーズ調査及び計画設計の委託依頼が来て、教育委員会所管部分を同期の板野美紀さんが、子育て支援課所管部分を私が担当することになった。

待機児童対策から子育て支援全般に関心の広がっていた私にとっては、とてもありがたい調査であった。B 市は、次世代育成支援対策推進法（以下、次世代法）に基づく次世代育成支援行動計画（以下、行動計画）の先行モデル市として 1 年早く計画策定に取り組むこととなっており、行政としては高額な委託金額から考えても、かなり気合が入っていた。次世代法は、これまでの少子化対策の集大成といえる法であり、子育て支援のみならず仕事と子育ての両立、住宅、経済的支援など広範な内容となっており、2003 年当時、鳴り物入りで成立した法であった。しかしながら次世代法に基づく計画策定の手引き（以下、手引き）等の内容を見てみると、相変わらず待機児童対策一色の内容であったことは鮮明に覚えている。また手引きに沿った手続きでニーズ調査を行い、計画を立てるだけでは、市の独自性のある計画にはなりにくいと感じた。

B 市の先行モデル市としての気合を感じながら、芝野研究室としては金太郎あめのようなニーズ調査や計画ではなく、市の独自性を出す方向で動いていた。芝野先生は、審議会の中心的メンバーとして計画立案や方向性の検討、そして今回の委託の責任者を、私は市の事務局に入り、立案や調査に必要な事柄を一つ一つ準備していく役割を担うことになった。最も先生と行動を共にする機会を多くいただいたのは、この時期であったと思う。

B 市に多いときは週 5 日通い、調査に向けて当時の事務局の課長、主査等と打ち合わせしたり、ヒアリングに行ったりし、家に帰ってはそれをまとめる作業を繰り返した。大変ではあったが、課長や主査が気持ちよく対応してくださり、勉強になることばかりであった。夜遅くまで市役所に残って作業することもあった。しかし当時 24、5 歳だった私が、いくら委託先の者とはいえ、毎日のようにやってきては発言し、一連の準備や調査等を行うことを快く思っていない方々もいた。ご挨拶をしても一切口をきいてくたさらない方、私のことを叱責するときのみ口をきいてくださる方もいて、つらい思いもした。若かった私は必死で回りが見えておらず、その方々からすれば大した知識も経験もないのに発言する傍若無人な者に見えたのだろう。芝野先生に委託したのに、なぜあのよくわからない院生が担当しているのだと。確かにそのとおりである。あまりにストレスがたまり、芝野先生との打ち合わせで愚痴を聞いていただいたことも少なくない。先生からはストレスとは上手に付き合うようにご指導いただいていたが、当時はなかなかできずにいた。

教育委員会所管のものも併せて約 4300 件のニーズ調査を行った。B 市と協議を重ね、かなり独自性のあるものとなったと自負している。また、ヒアリング調査も行い、時間と相手方の許す限り市職員に同行

した。これ以上調査や調査結果等を詳細に述べることは避けたいが、すべての経験が学びであり、現在の私を創っていることには間違いがない。B市という一つの市に深く関わることができ、市独自の文化や個性を知ることもできた。あるいは行政に共通して流れるもの、在るものを感じ取ることもできた。また行政には独特の意思決定プロセスがあり、それはとても表面化しにくいものであることもよくわかった。いろいろな行政の方々と仕事をさせていただくにあたってこの経験は本当に役立っている。本調査がきっかけとなり、のちに関西学院大学とB市は包括連携協定を結ぶに至ったと記憶している<sup>1)</sup>。

## (2) 後期計画

本委託調査は、前期5年計画の策定のためであった。その後、後期計画策定のためのニーズ調査も芝野研究室に委託された。前期計画からの5年間に当時の担当者はみな異動なされ、市としての子育て支援への力の入れようにも変化があったように思われた。そのような中、調査過程で非常に理不尽だと感じ、どうしても納得のいかないことが起きた。今思えば幼く恥ずかしく、また反省すべき行動なのであるが、当時の私には限界が来ていた。大変なご迷惑をおかけすることは重々承知の上で、もう調査から手を引かせていただきたいと思いつめ、めったなことではかけない先生の携帯電話にお電話をして、涙ながらに辞めさせてほしいと申し出たことがある。先生はお忙しいにもかかわらず、私の普通ではない状態に非常事態だと判断してくださり、お話をきいて下さったことは忘れられない。すぐに動いてくださったのだと思うが、次の市との打ち合わせの際にはすっかりと事態が変わっていた。大変驚いたのでよく覚えている。先生の前で仕事や研究に関して涙したのは、これ1度きりだと思う。

## (3) 素朴な疑問から博士学位論文のテーマへ

話はまた少し戻るが、B市の前期計画策定に関わる中で、次のような疑問を持つようになる。行政独特の意思決定プロセスがある中で、果たしてニーズ調査は本当に計画に生かされているか。計画策定後の計画の進捗確認や評価はきちんと行われるか。この2つが博士論文のテーマを選ぶ大きなきっかけとなった。前期計画策定のころは、芝野先生と行動を共にさせていただく機会が特に多く、素朴に感じたことや疑問を知らず知らずにお話ししていた。本当にいろいろな話をさせていただいた。上記疑問についてもおそらくお話ししていたと思う。そうしたところなんと先生は、計画策定後の評価について厚生労働科学研究を取得して下さったのである。しかもちょうどB市の前期計画が動き始めたばかりの時期に、である。

## 3 計画策定プロセス分析と計画の評価—博士学位を取得するまで—

厚生労働科学研究のタイトルは、「IT活用による次世代育成支援行動計画推進評価と総合コーディネート・システムに関する開発的研究」(平成19-20年度厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業)。タイトル前半部分は私、後半部分は同期の板野美紀さんが担当した。本研究の平成19年度報告書(芝野2008)から私担当部分の研究目的を引用すると「次世代育成支援行動計画推進に関して1)①庁内評価と②利用者評価をデータベース化して実施されている事業の費用対効果を総合的に評価するシステムを開発すること」であった。

この研究は今から振り返っても大きなチャレンジであったと思う。B市こども部こども室(当時)に研究会のメンバーになっていただき、話し合いを重ねた。すでにPDCAサイクルの重要性は指摘されていたが、現在ほどその実行はなされていなかった。2002年に「行政機関が行う施策の評価に関する法律」が施行されて以降、急激に全国に行政評価はひろまったが、本計画のような個別計画においてはほとんど機能していなかった。行動計画そのものは総合計画の一部に確かに紐づけされていたが、各事務事業との

1) 2009年1月に関西学院大学はB市との包括連携協定を結んでいる。当時の「関学ニュース」の内容(抜粋)は次の通り。「同市の次世代育成支援施策の充実を図るため、包括的連携協力の協定を結んだ。(中略)今回の連携は、芝野松次郎・人間福祉学部教授のグループが、2005年にB市が策定した次世代育成支援行動計画「愛あいプラン」に協力したことに端を発する。」([https://www.kwansei.ac.jp/news/2009/news\\_20090130\\_002326.html](https://www.kwansei.ac.jp/news/2009/news_20090130_002326.html))

関係を個別に見ていくと、事務事業と紐づけされていない事業、予算がついていない事業など、行政評価では考えられない状況が多々明らかになった。特に予算がついていない事業が驚くほどあり、芝野先生、開発協力者とともに頭を悩ませ、費用対効果を測る難しさを思い知った。利用者評価についても、必要性の理解を得るのはまだ難しかった。個性が高く評価になじまない事業があるとか、利用者評価実施によりいわゆる欲求型の利用者が増えるから実施すべきではないなどの意見がでた。データベースシステムについても行政であるが故の課題が多く、何度も協議を繰り返した。試行錯誤の末、2年間の研究で庁内評価と利用者評価のデータベースシステムの試行版を開発するに至った。

随分と長くなったが、B市での前期計画策定のためのニーズ調査（計画策定プロセスの分析）と本研究での成果（計画の評価）が、博士学位論文の内容に直接つながっている。タイトルは、「A市次世代育成支援行動計画の総合評価－住民参加を重視した新しい評価の試み－」である。一つの行政の計画策定から計画実施を追った研究が果たして博士学位論文として認められるのだろうかと思ひながらであったが、そのたびに芝野先生にご指導いただき、また、励ましていただいて何とか授与にたどり着いたのである。

#### IV おわりに

振り返れば振り返るほど、いかに芝野先生に支えていただいていたかがよくわかる。方向性を定められず迷っている私に、常にチャンスをごくださったのである。そして、そのチャンスを私がどのように使うのか温かいまなざしで見守り、またご指導くださった。もし大学4年の夏に先生と面談できていなかったら、私は全く別の人生を歩んでいただろう。先生にはどのような感謝の言葉を並べても足りることはない。これから研究・教育で成果を出していくことで少しでもお返しをしていきたい。

例えば、先生のご長男にある研究でアルバイトをしてもらった時に垣間見ることでできた「父親」としての先生のお姿のこと、2003年と2013年にシカゴで先生にご一緒させていただいた時のことなど、限られた紙面では書ききれないエピソードが数えきれないほどある。どれもが私にとってかけがえのないものである。

ご退官後もしばらくは、お仕事等でご一緒できる機会があると聞いて少し安心しているが、正直なところ、あの研究室に先生がいらっしゃらなくなることにまだ実感がわかない。研究室の、となりのトトロの大きなぬいぐるみやスターウォーズのダースベーダーの立派なフィギアとも会えなくなる。先生は第二の人生として新たな道を選択されたとおうかがいしている。しかしながらこれからも変わりなく、研究や教育やさまざまな事柄についてご相談にあがらせていただきたく思っている。最後に、このような大変貴重な機会をいただいたことに改めて心よりの感謝を申し上げる。

#### 参考文献

- 芝野松次郎（2002 a）「児童福祉専門職の児童虐待対応に関する専門性向上のためのマルチメディア教育訓練教材および電子書式の開発的研究」『平成 14 年度厚生労働科学研究報告書』
- 芝野松次郎（2002 b）『社会福祉実践モデル開発の理論と実際－プロセティック・アプローチによる D&D』有斐閣
- 芝野松次郎（2008）「IT 活用による次世代育成支援行動計画推進評価と総合コーディネート・システムに関する開発的研究」『平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金・政策科学推進事業総括・総合研究報告書』
- 芝野松次郎（2012）「ソーシャルワークとしての『子育て支援総合コーディネート』実践モデルの開発的研究」『平成 24 年度日本学術振興会研究費補助金（基盤研究 B）課題番号：22330178 調査研究報告書』
- 芝野松次郎（2015）『ソーシャルワーク実践モデル D&D プラグマティック EBP のための M-D&D』有斐閣